

——青春がしたい。

妙案は授かりものであるとは誰が言ったか。

こんな素晴らしいアイデアを思い付いた理由は、言うまでもない。

徹夜作業続きで暴走した五感が捕捉した深夜の書齋——女性の着替えの気配を感じ取ったからであった。

迷わず最大加速、景色を遮るドアに足を向けて、飛んだ。

「とうつ！これは過失、ということは事故だ！すまんマスター！」

「ひゃあつ!?——、降魔はよ終われドーン——」

「あびゃーッ!」

書齋の扉は無事粉碎。

しかしテキトーに口にされた詠唱と共に展開された、虚空に燐光とスパークを散らす円陣——即ち『魔法』が薄暗い部屋の一角を眩く照らす。

事故に見せかけた豪快かつ陰湿な飛び蹴りも虚しく、魔法陣から発生する雷撃に完封されたトングリ帽子の少年——ナズナは情けなく悶絶した。

「ぬおおお、久しぶりにキタコレ……事故だと申した筈だぞ。ただの無力化に容赦なく魔法を使うとは、堕ちたなマスター」

「ただの加害者の分際が良くほぎく……ま、まあ、妾の速着替えに掛かればお手の物よ。そもそもお前の様な砂利ガキが妾の裸体を拝もうなど百年早いからな、うん」

「あ、そこは全然興味ないです」

「……………」

「ぐめんやう」

マスターと呼ばれた小柄な女性——アドラメレクは弟子の言葉に割りとは本気で落ち込んだ。

腰まで伸びる濡羽色の長髪に、服の各所から覗く陶器の様なきめ細かく白い肌を持った、引き込まれる様な美しさを持っている。

そして——頭部から生える一對の捻じれた角。そのいかにも『魔族』といった姿から彼女の在り方を決定づける、禍々しい空気を放つ黒いドレスに身を包んだ彼女は、明らかにただものではない。

しかし特筆すべきは——妙齢の女性にしては小柄なその姿だろう。

マスターと呼び慕う少年から舐められるのも。

肉体に引つ張られたかの様なそのちぐはぐな精神性も。やや古風なその口調も。

その全てが、その小柄な肉体に凝縮されているからこそその秘めた魅力を発揮する……と論じるくらいには、少なくとも弟子ナズナは——そんなアドラメレクがすこすこだった。

余程の事が無い限りそんな気持ち口にしなないが。

「さ、そんなことより」

「え、放置？」

「フレキシブルな対応を要求する。マスターは理系だから出来る出来る」

「学系関係あったか？」

「ない」

ある意味フレキシブルな対応をしたナズナにアドラメレクはなんとも言えなくなったが——弟子の蒼い瞳の奥にいつになく真面目なものを感じ取る。

佇まいを正した彼女を見て、ナズナもまた崩れた自慢のトンガリ帽子を被り直す。

「お前のその妾を完全に舐め腐った態度は今置しておく——それで、何があった」

「マスター、俺は貴女から多くのものを貰って来た。魔法の知識、世間の一般常識、生活、美味しい飯。どれも、『以前』の俺であれば得られなかったものばかり……本当に、感謝している」

「ナズナ……お主……」

ほろり、とアドラメレクは自分の涙腺が緩むのを感じ取る——ワケがなかった。

深夜テンションで師匠の無防備な着替え中に襲撃する人間がまともな発言をする……嫌な予感しかしなないだろう。

「けれど聞こえてくる……俺を『狂人』と呼ぶ世間の声が」

「割りといつもそうだろう」

逆に僅かでも自覚があるのが驚きであった。

「その通り——だから友達の一人も出来ず、壁や植物に話しかける暴挙に出た。わかるか？ 末期なんだよ」

「それは寝耳に水だが……」

予想を遥かに上回る悩み具合に、アドラメレクはドン引きした様に顔を引きつらせた。

だが、そんな無礼極まりない視線を向けられる当人のナズナは意に介した様子は無く——それどころか高々と宣言する。

「潤いだよ、今の俺の人生には潤いが必要だ……ああ、そうに違いない」

「いや素行だろう」

「なんだと言ってみろコラ」

「ヤク中ゼロ歳児、魔法オタク、学会芸人、文系の暴力」

「なんだそのヤベーやつ」

「これ全部お前の通称だからな」

「俺につ！ 足りないものっ！ それは——ずばり『青春』だあー！」

あだ名という罵倒を機に、ぼつちを拗らせたうら若き少年魔法使いは遂に壊れ——フローリングに額を叩きつけた。

喧しすぎる土下座だった。

「お願いだマスター！ 俺に青い春を！……このまこと過酷極まる学歴社会を生きる、かび臭くインク

塗れの若い時分の潤いをくださいいいい！」

「まず文字数を減らせ、自虐と欲望が混ざってわけがわからん」

「学校に！ 行かせてくれえー！」

「さて——そろそろ寝るか」

「マスターあーうー」

弟子の嘆きをアドラメレクは悠々と無視することにした。

だが彼女の認識は甘い。目の前の少年が罵倒される理由——その執念深さと手段の選ばなさにあるのだから。

「くっそお！ このジャリンコマスター！ 今一度俺の恐ろしき知らしめてやろう！ つえあー！」

「喧しい！ お主はいい加減その手段の選ばなさを——ちよ、引つ張るな引つ張るな!? ばか、やめ、裾だけはやめなさい裾だけはっ!? 見えちゃうっ！ 色々見えちゃうから!?!」

「じゃあさあー!? 学校通わせてくれよ！ 名高き【夜の魔法使い】さん！」

「いやだー！」

「否定形!?!」

何故って——アドラメレクは頑なにナズナの身が心配で仕方が無いが故に他ならない。

親の心子知らずとも言っべきか、目の前の狂人ナズナが持つ才能は、はつきり、言っ、て、異、常、だ。

剣と魔法が至上とされるこの世界で、異常と称されるその力を持つ意味。アドラメレクとて、彼を出会ってから様々な事を教えてきた。

だが彼を鍛えれば鍛える程、かつて彼女が忠義を捧げていた『魔王』の姿を連想させるのだ。

その力の質も。

持て余した力への怯えを誤魔化す為の、その振る舞いも。

「むう——潮時、か」

「え、マジ」

「それに——お主の記憶喪失の事も、ある。最低限の基礎は教えた………頃合いかもな」

「ほんとかー?」

「ホントだ」

「いいいやったあああああ！ 大好きだマスター——」

「こういう時だけ減らず口を………わかったわかった。だから引つ付くな」

口だけでそう振る舞いつつアドラメレクはナズナを引っぺがし、書斎のデスクから一枚の羊皮紙を取り出した。

「よし——我が弟子ナズナよ」

「う、うす」

「此処に、エンミディオ神王立魔導学院の特別推薦枠がある」

「ほうほう………この大陸テラリア全土でも有数の魔導師と騎士を育成する教育機関と聞くと、そ

れが何か?」

「私の名で推薦してやる——青春とやらを送りたいのなら、お前は(この学院で)トップを目指せ」
その言葉に、ナズナの顔が少し強ばるのをアドラメレクはこれまでの経験から感じ取った。

「青春なんて口にはしているが——それは必死になって『自分』を生み出そうと頑張っているからだろう?」

「……」

「今のお前なら大丈夫だ——示せ。そして世に見せてみる、その魔法を」
チカッ

けれどそれも一瞬。次の瞬間には、腹の立つ不敵な笑みをナズナは浮かべる。

「心配は不要だ——俺、マスターの弟子だからな」

全力で期待に応えようとする、若人の姿がそこにあった。

しかしアドラメレクは、その激励の反面どうしようもない不安が胸の内に燻っている。

親心か、それとも別のナニカか。

それとも——彼の記憶にまつわる舞台へ招いた罪悪感か。

「よし、早速準備に取り掛かろう。それでマスター、試験日は? 二年後? 一年後?」

「二週間後だ」

「え?」

「だから二週間後だ」

「……………ま?」

「ま」

「この後のちゃくちゃ勉強した。」